学校運営協議会議事録

校　　名	府立槻の木高等学校
校 長 名	無津呂　弘之

開 催 日 時	令和４年 10 月 22 日（土）10:00　　～　11:30
開 催 場 所	本校　１Ｆ　会議室
出席者(委員)	安田信彦　副会長、浅野良一　委員、宮坂政宏　委員、山本冬彦　委員
傍　聴　者	浅野委員の勤務先（兵庫教育大学）から、現職教員の大学院生１名
協 議 資 料	校長、教頭
備　　考	

議 題 等（次 第 順）
（１）　令和４年度　学校経営計画進捗状況 （２）　スクール・ミッション（案） （３）　令和４年度　授業アンケート（前期）の結果 （４）　質疑・応答
協議内容・承認事項等（意見の概要）
（１）　【校長より説明】 ７月には新型コロナウイルス感染症の第７波により、学級閉鎖、学年閉鎖の対応があったが、現在の感染状況は落ち着いている。現在のところ学校行事、部活動等概ね計画通り進められている。今回は学校経営計画記載の５点に絞って報告を行う。 ①　文化祭 今年の文化祭は、第７波が来たときには、９月初めの開催について心配されたが、多くの教員そして校長も通常開催で行いたい思いがあった。その一方で、対策を緩めることで、感染拡大に心配している教員もいた。検討を重ねる中で、「今年の３年生はずっと制限を受ける中で学校行事を行ってきたので何とか本来の形の文化祭をしてあげたい。」ということで、通常開催することした。生徒たちは本番とゲネプロの時以外はマスクを着用し発表が終わった後もマスクを着用することで、文化祭終了後の感染の広がりはなかった。

きちっと対策を取れば教育活動を行うことができることを生徒たちが示してくれた。それと同時に生徒の頑張りを支える教員の体制がしっかりできている。模擬店などのサブ企画や中庭での舞台発表は前日の雨により企画は実施できないと思ったが、有志の教員たちが 6 時半前ぐらいから出勤して整備を行い、実施できた。

また、PTA によるメビウス喫茶がコロナ前まで好評だった。ここ 2 年ほどは新型コロナウイルス感染症の影響により実施できていなかったが、ぜひ今年はやりたいということで、感染拡大防止の観点から飲食はせずに、ペットボトルの飲み物や個包装されたお菓子等を販売する形で行った。生徒たちは本当に楽しんでいた。

多数の中学生が事前予約したうえで来場し、本校の様子を見学した。文化祭が制限の加わった形の実施であれば、本校の伝統が途切れるおそれがあった。今年、通常開催できたことにより、2 年生、1 年生に伝統を繋げていくことができ、非常に満足度の高い文化祭ができた。

② 槻の木　NEXT　STAGE

学外の学びにより、人間性を高め、社会で力強く活躍することのできる人材を育成する本校が非常に重要視している取組み。新型コロナウイルス感染症により実施できていなかったが、昨年度から少しずつ再開し、今年は大きく前進させた。1 つめは、昨年度からはじめた台湾のヤンミン高校との Web 交流である。今年の第 1 回は 9 月 24 日に実施した。生徒はすでに 1 人 1 台端末が配備されていたこともあり、画面を通して、台湾の高校生と十分にコミュニケーションが取れていた。第 2 回は 11 月 19 日実施予定。今後は、新型コロナウイルス感染症が収束し、行き来がしやすくなれば、互いの学校を訪問し合って、対面で交流を行いたい。（本校参加生徒数 9 名、ヤンミン高校の参加生徒数 12 名）

相手の参加数が本校の参加数よりも少し多かったので、本校生徒に参加者を増やす働きかけを行っていく。

２つめは、大阪公立大学の訪問と講義への参加であるが、昨年、新規に依頼することで始まった交流である。今年は 7 月 8 日に実施し、生徒の参加人数は 36 名だった。また、今年は PTA の取組みとタイアップし、社会見学会も大阪公立大学で実施することができた。保護者に生徒の様子を見学できると案内したところ 21 名の保護者が参加した。

生徒たちがキャンパス見学後に大学生とともに講義を受ける様子や大学生と意見発表する姿を見てもらうことができた。保護者からは「生徒の大学訪問と社会見学をタイアップした事業は珍しいため、ありがたい」という言葉もいただいた。生徒たちにも大変好評な取組みであった。

３つめは、10 月 20 日に実施した神戸大学訪問である。神戸大学は新型コロナウイルス感染症が流行する前から受入れをしていただいている。経営学部を 12 名の生徒（1 年生 8 名、2 年生 4 名）が訪問した。

神戸大学大学院経営学研究科の忽那憲治教授による「アントレプレナーシップ、イノベーションとは何か」の講義を受けさせていただいた。生徒の中には、教授に積極的に質問をする生徒もおり、集中して取り組んでくれた。最後に、神戸大学の学生の部活動である、「起業部」のアントレプレナーシッププレゼン発表に本校生徒も参加させいただいたが、ただ聞くだけではなく、意見も求められるので、ちょっと緊張でかたくなる生徒もいたが、自分の意見を堂々と述べる生徒もいた。

この交流終了後には本校生徒たちも大学生に色々話しかけるようになり、終了時間を大学の好意で 15 分ほど伸ばしていただくほど熱心な交流ができた。この機会に神戸大学をめざし、将来起業してくれるような生徒が出てきてほしい。本校がめざす「これからのグローバル社会で活躍できる人材育成の取組み」がさらに広がることを期待している。

そして、今年度、最後の大きな取組みとなるのが韓国の中央大学校師範大学附属高校との交流である。本校の姉妹校であり、コロナ前までは相互に高校を訪問し、ホームステイを行っていた。これが新型コロナウイルス感染症の拡大によりすべてストップしていた。コロナも収まりつつある状況で、韓国の先生方とも調整をし、令和 5 年 1 月 27 日から 30 日まで、まず韓国の生徒にお越しいただき、本校生徒については令和 5 年 3 月 24 日から 27 日韓国を訪問させていただくということで、今募集をかけ始めているところである。韓国の先生と話をしている中で、来日したい、積極的に外国に出たいという生徒は、相当数いるそうで、本校が同等の人数が集まるか、ちょっと心配しているところである。ホームステイを受け入れるというのが条件となっているので、相手方の学校でたくさん希望者が出てきも、本校の希望者が少ないと、制限が出てしまうので、14～15 名は集めたいと思っているところ。これまでできていなかったことを新型コロナ感染症の対策をしっかり取りながら実施していく方向で動いている。

③ 修学旅行

今年も、長崎方面で実施。2 年生のフロアに自分たちで事前に色々調べて作成した壁新聞が掲示されている。お互いの気持ちを高め合うような内容の作品となっており、事前学習もしっかり取組んでいる。年末に向けて、インフルエンザとコロナのダブルで感染が拡大することを心配しているが、12 月 13 日から 16 日までの実施で今準備をしている。長崎になった経緯は新型コロナウイルス感染症対策である。本来、本校は沖縄（宮古島）に行っていたが、コロナ渦では実施できないということで万が一のときは保護者に迎えに来てもらえる長崎とした。令和 5 年度までは長崎で実施、以後は、状況を勘案して沖縄に戻す案を考えている。

④ 働き方改革

学校経営計画の中でもしっかり取り組まなければいけないこととしており、現在、様々な対応をしているが、抜本的改革をしない限り解決しない。本校も長時間勤務（80 時間超えや 100 時間超え）の教員が多数いる。6 ヶ月の平均であるが月に 80 時間超えが 5.6 人、100 時間超えも 4.5 人もいる。

対象教員に対して、校長がその都度、面談を実施し、産業医面談も早めにするようにスケジュールを組んでいる。大きな要因は土日の部活動の付き添いである。府でも知事が部活動の問題に非常に関心を持って、各部局に働きかけを行っている。

続いて、育休について、男性教員に対しても、積極的に取得するように進めている。本当に大変良い政策だと思っている。ただし、代替脅員の確保が現場の校長たちの頭を悩ませている。府として、制度と人的確保をセットでしないと現場の教員に負担がかかるため、課題だと思っている。

⑤ 志願者状況

中学生の意向調査（12 月調査）の調査結果で、本校への進学志願者が、例年より減少して

いることが分かった。これまでの傾向では、これから増えるということはほぼないため、非常に危機感をもっている。今後、高槻市内の中学校に対し、志望者増への協力依頼に行こうと思っている。学校説明会は、他校よりも回数を多く、そして早い時期からやっている。手ごたえも十分あるが、志願者が集まらない状況である。前回の学校協議会の中でご提案いただいた本校の教員と中学校の教員が互い交流をし合って、授業のことを研究するとか、学校の様子を理解しあうか、信頼関係をさらに深め、中学生を安心して本校に送っていただける取組みをすすめたい。本校の探求の授業の様子を中学生に見ていただいて、高校はこんな面白いことする。自分たちの学びをこの様に発展できると思っていただければ、本校へ来ていただける生徒も増えると思っている。

（２）　【校長より説明】

スクール・ミッションを令和６年度の完成に向けて作成することとなった。（スクール・ミッションの作成にあたって、作成要領に沿って説明。）

各校の「存在意義」や「各校に期待されている社会的役割」「めざす学校を定義」するものであり、各校で作成し、教育委員会が精査し、公表するもの。

社会、地域の実情を踏まえて、連携して作成を進めるという意味から、学校運営協議会の委員の皆様から意見をいただきたい。

（３）　【教頭より】

授業アンケートの集計結果について

例年と大きく数字が変わっているところを中心に説明を行った。

「毎時間、授業の目標や大切なポイントを説明してくれる」の数値上がっている。

教員が「本時の目的」を明確にしたり、前回の復習項目を授業で導入することによってアンケート結果に反映されたと感じている。

「ICT 機器の活用」についても数値が上がっている。

（４）　【スクール・ミッション（案）について】

・　ミッションの再定義は学校を今後変えていこうというきっかけとなる。これまで成果を出してきたものであるが、「志願者の減少」という言葉があったが、作成して 15 年がたち少し古くなっている感じがする。「原石を宝石に」あるいは「規律ある進学校」、「あたりまえのことをあたりまえに」というフレーズは、開校当時は府立高校で掲げられていなかった。そこで非常に目新しくて、非常に期待できるということで成功したのではないかと思う。今回のスクール・ミッションは今までのものを踏襲する形となっているので、これを維持して学校運営をしていくという印象がある。別案としては大きく変えていくということを盛り込んでいくということを議論した方がよいのではないか。変えるとするならば、「槻の木　NEXT STAGE」の徹底がなされていない。参加人数が少ないので、学校全体の動きになっていないという気がする。学校の方向性を大きく変えていくのであれば、「槻の木　NEXT　STAGE」に大きな力を入れていく。そのために組織構造を改定し、「槻の木　NEXT　STAGE」を独立させるというのもいいのではないか。

・　「槻の木　NEXT　STAGE」を拡充していくか。「今の強み」を押していくのかはっきりした方がいい

- スクール・ミッションは子どもたちに出すものではなく、社会的に出すものなのか。「スクール・ミッション」「スクール・ポリシー」「アドミッション・ポリシー」も含めて生徒や中学生にどうアピールできるかという視点は持った方がよい
- 「スクール・ミッション」にある「国際感覚に富んだ視野を有する 21 世紀のグローバル社会を担うことのできる有為な人材を育成する」というものが具体的にあった方がいい。このグローバル社会に対する漠然としたものに外国を含めた国際社会の動きに関してどの様に担えるかという意思決定に参加できるかという問題があるのではないか。担うといういい方はよくわかるが、例えば外国語をなぜ学ぶかと言ったら、国際関係をよりよくするため自分はどの様に意思を出せるかということを書き込んだ方がよいのではないか。例えば、「有為な人材の育成」もよいが、「市民の育成」とすると、社会に対する関わりのあり方やグローバル化の問題というのが、もう少し見えてくる気がする。
- グローバル社会を担うことのできることの中身を精査あるいは補完した方がいいのではないか。また、グローバルコミュニケーションを身近な問題として、外国語の授業と繋げていくとか、外国語だけではなく、他の教科の授業と繋げていくということもよいのではないか。
- 台湾との交流において、生徒たちに色々聞くことにより、うまくいけた部分とそうでなかった部分が出てくるのではないか。Web での交流は短い時間なので、実際に生活を一緒にしないと、見えてこないのかもしれないが、そういう活動自体からヒントが出てくるのではないか。
- 「槻の木　NEXT　STAGE」の戦略が 2 つあって、1 つは直に自分の将来のイメージをそこで掴んでいくことと、もう 1 つは直接自分の将来イメージはつかめないが、今はこういう職業があるということを知ることで磨いていく側面がある。「槻の木　NEXT　STAGE」がどの大学を選ぶかということについて、もっと広いニーズのキャリア教育とのコンタクトをどのように整理するかが必要ではないか。
- 働き方改革について、育休の話も教員のそういう権利を保障しようと思ったら、フォローする人たちを、一種の予備労働力みたいな形でプールせざるを得ない。あるいは、ある程度そういう人たちを雇っておいて回っていくシステムを作るなど、なかなか悩ましいところで、簡単に結論が出ないものである。文科省は採用試験の期日（7 月 8 月）をもっと前倒しにして、企業への採用が内定する前までにやろうと考えているようだが、教育行政とか教育制度の問題については、むしろ、現場からどう発信していくかが大切だと思う。
- 「槻の木　NEXT　STAGE」を行うことは先生の努力は大変なものではないか。今後も継続をしてほしいと思う。
- スクール・ミッションと定員割れの問題に関して、本校の独自性「こういうことをやって、こういう力がつきますよ」がわかりやすい形ででているか。「受験は団体戦」「原石を宝石に」と同じようなことをいろいろなところが言い出してきているので伝え方をどのようにしていくかが大事。
- 伝え方が同じような場合、例えば私学でも同じようなことを最近すごく頑張って言っている。伝わり方が一緒になってしまう。一緒になってしまったら、例えば校舎が立派であるなど、学力をつけることができるとしても、他の魅力で他校に行ってしまう。だから「他校との区別化」をもっと強く出した方がいい。

・ スクール・ミッションについても府教委から言われているものも抽象的なので、こういう書き方にならざるを得ないかもしれないが、書かれていることが、他の学校でも行われているようなものになっている。本校の特徴をもっと出すようなものにした方がよい。
・ 働き方改革、いろいろ問題になっている。個人のレベルに落としこむのか、学校の先生方は、時間が長くて、長時間労働で肉体的にしんどい。精神的にもしんどいので、ちょっと支障をきたすような人もいるということ。例えば、地方では地域の学校は複数でクラブあるいは学習を見ることで、部活や学力を高めていくこともできる。
・ 中学校教育を変えていかないという話を聞いていた。
・ 先生方の学力観をアップデートしなければならない、学力観っていうところをもう 1 度変えていかないと授業が変わっていかないと強く思う。そのうえでスクール・ミッションを見た時に、進学で重視される学力と 21 世紀のグローバル社会を担うことのできる有為な人材を育成する学力が一致しているのかどうかいうところが学校の意見と同じである。高校入学させるための学力とその先にある社会に出てから活躍できる基礎となる学力がちょっとずれてきているのではないか。10 年前に「これからの中学校の理科教育をどう変えていくのか」というテーマでワーキンググループを立ち上げたことがあった。人口が減少して、子どもの数がどんどん減っていく中で、日本の理科教育において、優れた才能のある子どもをどうのばしていくか、どう見つけて、どうしていくのかっていうところがすごく大事だということが 10 年前に出されていた。10 年前のさらに 10 年前の時には、留学生と日本の大学生を見た時には明らかに日本大学生の方が優れていた。ところが 10 年前の時点でもう追いつかれた。それから 10 年経って、おそらく逆転している、アジアの色々な国の学生の方が優秀ではないかと感じている。それは日本が受験に引きずられて満点主義ではないが、基礎基本とか受験で点が取れるところを重視しすぎて、本当にそれらを考える力を持った子どもを育てることができていないのではなか。中学校も三観点「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」三観点の中で思考を判断、表現する力を中心に据えながら、それに主体的に取り組んでいく態度、試行錯誤する態度を大切にしている。学力観をアップデートして、授業の仕方を変えていくところが必要と思っている。そうなるとやはり、基礎基本とか、進学を重視するっていうところを前面に持ち出したりしたときに子どもたちがここで学びたいとなるか。これから 10 年たったら、ドローンが有人で飛んだりとか、会議などで英語の自動翻訳機があったりとか、かなり変わっていく。特に「21 世紀のグローバル社会を担うことができる有為な人材」とは何だろうかっていうことについて、中学と高校両者が教科の学習から対外的な学習を中心に、どんな力をつけさせることができるのかという観点を見直して発信していくっていうか大事なのではないか。
・ 学力の向上については、かなりシステム化してできている。「思考力・判断力・表現力」をつけていくためには「槻の木　NEXT　STAGE」にチャレンジをするのか、現状の強みを維持していくのかという話をしたが、現実的には今の強みをベースにしていくことが大事である。そこに「槻の木　NEXT　STAGE」のあり方を考えていく。そして、「21 世紀のグローバル社会を担うことのできる有為な人材を育成する」点においてはグローバルな視野を付けて学びの意欲を高め、次のステージに行くための大学をきちんと選ぶといったすっきりした形の方がいいと思う。ミッションについては槻の木高校らしさである「みんながきちんと勉強す

る仕組み」があって「風土」がある。バックアップする先生がいる。そしてそれを落ち着いた状態で勉強ができることが強みであり、それをなくしてしまうと普通の学校になってしまう。「槻の木　NEXT　STAGE」と今やっていることの関係を整理できれば良いのではないか。

- 「受験学力を鍛える」ということがベースにあると思うが、むしろ、そういった結果としてそうなるというか、特色をどんどん伸ばしていく、ということが我々のミッションだという様に発想を転換されたらどうか。
- 生徒向けの「スクール・ミッション」を作成するのはどうか。
- 教師は学生１人ひとりに対して本当に親身になってやっている。これは私学であれば、どこでもやっている。槻の木の特徴をわかりやすく保護者等に伝えていく必要がある。「思考力・判断力・表現力」をつけるためにどうするのかと言うことを一言で言えれば生徒が集まってくると思う。グローバル社会の中で生きていくだけではなくて、地方にある中小企業の社会で生きていくにあっても必要になってくる。学びにどう生かしていくか自分自身でどう身につけていくということを出していければいいのではないか。小中高の連携を強め、槻の木の顔やメソッドが見えるよう長期的に計画していけばいいのではないか。
- コミュニティースクールの全国大会を文科省が行った時の話だが、地域連携をするために教員以外の方を招いて窓口となり、接続していかないと働き方改革になっていかないということであった。
- 今回の学習指導要領に受験で空洞化した中等教育を本来の教育に戻すことが書いてある。
- 中学校など中等教育は教科指導だと思う。きちっと教科があってで、教科担当者がきちっと教える。中学校は教科担当者制で小学校は担任制で、教科教育がきっちりやれるということがベースだと思う。様々な市が「教育日本一」をスローガンに掲げている。教育の話をしているときに、高槻は授業力を日本一にしていこうという話をしていた。授業力を高めるためには授業見学しかないと思う。色々な研修を受けるのではなく、先生方の授業を見てきちんと子どもを見取って、瞬時に子どもの思考を浮かべるような質問をするなど、いろんな先生の授業を見て感じていくしかないと思う。学校の中だけでなく、外部の人にいろいろ見てもらう機会を作りたい。また、見せてもらう機会を作りたいと思っているので、中高での連携が進められていければいいと思っている。

次回の会議日程	
日時	令和５年２月10日（土）　14：45～
会場	本校　会議室